

石塔の多様化と消長

天理市中山念仏墓地の背光五輪塔からの

村木一郎

The Diversification and Decline of Gravestones: Studies from the *Haiko-sorinto* Gravestones in the Nakayama Nembutsuji Temple Graveyard in Tenri City

①はじめに

②研究史

③中山念仏墓地背光五輪塔の編年

④石塔の多様化と背光五輪塔の消滅

⑤おわりに

【緒論】

奈良県天理市中山念仏墓地には中世から現代に至る九千基を越える石塔が存在する。これらは、一六〇一七世紀は背光五輪塔、一八世紀は舟形、一九世紀は桶形、二〇世紀は角柱形と、時代とともに主要形式が変化していく。なかでも一〇〇年にわたり立てる背光五輪塔は、中世から近世への転換期に盛行し、惣墓（共同墓地）形成過程をたどる好資料である。そこで、本稿では背光五輪塔に着目し、まず三型式一八類に分類する。そしてそれを基礎に、他形式の舟形、桶形との比較を通して、石塔の形式・型式が多様化する現象を捉える。次に、石塔の大きさ・刻まれた法名（戒名）の分析によって、石塔形式（型式）の違いは格差を表現しており、それは石塔の造立数が増加する一七世紀末から起る現象であることを示す。すなわち、誰もが石塔を立てられなかつた当初は、石塔を立てることによって格差を表現していた。しかし造立数が増えるにつれ、人とは違つた石塔を立てるにより格差を表すようになるの

である。庶民層の墓で捉えられたこの現象は、この時期に庶民層の階層分化が進んでいることを考古学的に示している。また、ひとつの一石塔に書かれる法名の数（人数）を手がかりに、石塔が個人のものから複数人のものに変わっていくにつれ、背光五輪塔が消滅していくことを示す。石塔には宗教的側面と機能的側面がある。いずれも重要なが、機能面により大きな要因があり、ある形式が消滅していく過程をたどる。